

日中近代軍事用語の交流と相互影響に関する考察

— 『中日近代新詞詞源辞典』の編纂のために

仇 子 揚

— Examination with Exchange and the Mutual Influence of Modern Sino-Japanese Military Terminology —

QIU Ziyang

The writer studied transformation and the interchange of military terms in modern Japanese and Chinese and discovered in particular that parts of the Sino-Japanese words had emerged from the classical Chinese of documents or in the English-Chinese dictionary of the 19th century, then evolving and impacting on modern Japanese (as well as modern Chinese). The writer also considered citing the specific individuality of Sino-Japanese words as a foreigner.

Derived from the original question “What military terms in the present-day Japanese and Chinese language were inherited by the former?”, this report will investigate the following: How many military terms were established in present-day Japanese and Chinese through exchange and influence during Early-Modern times in the Japanese and Chinese language. This report will also explain the actual situations and characteristics of the exchange and mutual influence of modern Sino-Japanese military terminology.

キーワード：新漢語 (New words of Sino-japanese)、軍事用語 (military terminology)、日中同形語 (Isomorphic words of Sino-japanese)、日中近代語彙交流 (exchanges between Recent Chinese and Japanese)

1 はじめに (研究意義について)

近年、日中近代漢語に関する研究は周知のようにすでに大きな成果が挙がっているが、軍事分野の漢語を考察対象として絞り、しかも同時に近代日中語彙対照比較、特に「中国語に存在した語彙資源の利用」を視点としている先行研究は管見の限り見られない。これまでの近代軍事用語を対象とする研究には、信岡 (2003~2008) および胡 (2014) が列挙できるが、両方とも辞書の解題、訳語の成立経緯をメインとして考察しているものである。信岡 (2003~2008) はドイツ語と日本語との対訳辞書の比較、その日、独両言語間の翻訳の特徴を明らかにすることを目的としており、中国語との関わりには言及していない。胡 (2014) は『五国対照兵語字彙』¹⁾ が収録した二字漢語を中心として考察し、それらの語について『日本国語大辞典』に記載されている初出例との比較を行ったが、日中語彙交流の部分として見られるのは「服務」という語をめぐる個例研究に留まっている。

このような状況に基づき、筆者は、多くの研究者がまだ注目されていない軍事分野の用語に着手し、それらの語彙における日中両言語間の相互的な影響を視点に入れ、また特に近代新概念を翻訳する際の「既存の漢語資源」の利用状況、つまり古典漢籍語、近世中国語の活用実態を考察しつつ、漢語における中国⇒日本⇒中国という伝播経緯の中で発生した幾つか連動的な影響を解明することを目的とし、研究を進めたいと考えている。

2 『中日近代新詞詞源辞典』の編纂概要及び本稿との接点

『中日近代新詞詞源辞典』は筆者の指導教員である沈国威氏が発案で現在編纂中の大型辞書である。沈 (2015) にも既に紹介されたように、その編纂目的は主に以下の二つに概括できる：

①近代漢語研究のためであり、究極的には大型国語辞書の語源記述のためである。中国の『漢語大詞典』は、出典、意味の変遷に関する記述において大きな不備がある。特に19世紀以来の新語、訳語の場合、その欠落が一層顕著なものである。

②近代新語の成立過程を追跡するためである。16世紀以降宣教師の東来を皮切りに、西洋の新事物、新概念が伝来した。その過程で漢字文化圏において同形語の形を有する近代新語訳語が形成された、近代新語訳語の成立過程を追跡することが必要である。

そのため、本辞書における収録対象語彙については、「日中同形の近代新語訳語を中心に、そ

1) 『五国対照兵語字彙』(1880) 参謀本部編。近代日本最初の軍事用語を収録することを目的とする対訳辞典。フランス語 abc 順。これに対応するドイツ語、英語、オランダ語、日本語を付す。(注：入力便宜上のため、上記のような一本来旧字体表記の書名を新字体で表すことにする)

の語源、語誌、初出、造語者、理據（外部、内部）、伝播、定着、変容等を明らかにする」ことを目的とし、「できるだけ出典を時代順に示し、語形、意味の変遷を明らかにする」ことを目指し作業を進めるという。

また、当辞書の見出し語については、『現代中国語常用詞表（草案）』（商務印書館2008）、『広辞苑』第5版を含む日中近代漢字語研究の諸リストの収録語彙を参考した上で、「日中同形」および「意味、文体等に見る近代的特点を持つもの」から選出したため、本稿における調査対象である「現代の日中両言語の中でもよく使われていた軍事分野の漢語」が多く含まれていたと考える。なぜなら、近代漢語体系の変化について、日本の場合は飛田（1966）が指摘していた「漢語は明治以後にあらわれた語の中心をなし、おそくも大正七年までには、ほとんど形成されていたと思われる」のように、明治以降における西洋文化などの輸入に従い、それらの概念を表すために大量の漢語が借用・造語されたと思われるためである。更に大正期には一般化され、広く使用され始めたが、その後では「口語体書き言葉が成立していき、多くの人に受け入れられる読みやすい文章が必要とされるようになると、使用される語彙の範囲も限定されていき、当初あった多くの漢語の中から真に必要とされるものが絞られていったでしょう」（田中（2013））のように、多くの漢語が淘汰され、周辺語化したと見られる。

一方、中国語における日本製漢語借用の場合でも、「時間が経つとともに、これらの語はいくつかの淘汰を経て中国語に定着しはじめたが、文法上ではやはり馴染まないところを見せている」（陳（2001））というような現象が存在しており、一旦中国に流入したが、現代中国語の意味用法に適応できないためか後のいつの間にか使われなくなって、新しい言葉に取り代わられた語（万年筆→鋼筆、切手→郵票の類）があると見られる。また、そのような現象は拙稿の仇（2017）にも取り上げた「爆撃」の例のような「近代以降の日本によって再生転用された漢籍語」も含まれていたと考えられる。

よって、「現代にまで生き残った日中同形漢語」を基準として、その逆方向からこれらの語における現代語としての成立、及びその過程の中での意味変遷、または日中両言語間における移動と相互影響を検証し、最終的には「これらの語における現代日中両言語の中に果たしていた役割はなんだろうか」を明らかにすることを目的とすれば、この辞書の見出し語範囲から対象語彙を選択することがもっとも適切かと考えている。

そして、筆者はこれら収録語彙の出典調査と語誌考証に協力しているため、同時に同じ方法によって自身の研究テーマである軍事用語の調査が可能である。その調査により、当辞書見出し語の中における軍事分野に関連すると見られる用語の語誌と意味変容を明らかにし、辞書全体の編纂の一助となれば幸いであると考えている。

3 『中日近代新詞源辞典』所収軍事用語の全体特徴

調査対象とする語彙の抽出については、日中同形語を目安に筆者の判断で行った。とりわけ、軍事分野に関連性が高い専門的なものに注目し、重点的に抽出している、現代語の視点から見れば軍事分野との関係が薄く、むしろ他の分野でよく使用されており、軍事用語であるかどうかの判断のし難い語は割愛した。

よって、前節で述べていた「日中同形」および「意味、文体等に見る近代的特点を持つもの」に当たる『中日近代新詞源辞典』の候補語彙リスト（沈（2015）は5100語を選出したと述べられていたが、後にはさらに調整があったため現段階では6400語まで増加した）から、その基準に相当する258語を対象語として選出した。

そして、上記の対象語における全体的な特徴について、まず言えることとしては、漢籍出典が発見できない語が63語に対して、ほかの195語がすべて清代前期（1840年前）の文献から使用例が見られる中国固有語であることが挙げられる。つまり、現代日中両言語共通に使用されていた軍事分野の語彙では、近代新造語よりはむしろ旧来の古代、近世中国語から受け継がれた在来漢語が多いという傾向がある。

特に、語感上では一見「西洋の近代文明吸収によって造語された」新語と思われるが、実際漢籍資料に存在し、翻訳の際に流用されたものが多くと見られる。その典型例としては以下のようなものが挙げられる：

弾薬、地雷、海軍、減員、警戒、軍閥、軍官、軍需、砲兵、砲台、司令、現役、砲弾、
砲火、装備

これらの語はすべてが前述における1840年以前の中国漢籍文献に見られる語であり、実際の語誌調査を行わない限りは近代製漢語、場合によっては特に日本製漢語だと思われ、誤認されやすいものも多いであろう。もともと、近代漢字文化圏における翻訳作業の共通ルール及びその利点として、古典漢籍などにその意味に相当する「既存の漢語資源」があれば優先的に訳語として活用、置き換えることができる、というようなことが挙げられる。その問題について拙稿の仇（2015）にも論述していたが、すべてが古典漢籍の漢語が元来の意味が一貫したまま継承、流用されることなく、何かのルートを経由し、日本に伝わり、そして近代日本語としてアレンジされ、再び中国語へ還流したパターンに属する語が多く見られる。

もともと、近代漢語における日本語⇒中国語への影響ルートについては、沈（2016a）によれ

ば以下のような三つのパターンにまとめられる：

- ① 日本語借形語：日本語から漢字形のまま、言葉を借りるというケース。
⇒「哲学」、「義務」、「起点」の類。
- ② 日本語借義語：文字列は漢籍にあるが、意味は漢籍のものではなく、日本語から借りた新しい意味である。意味の拡大や更新が日本で完成されたもの。
⇒「革命」、「共和」、「社会」の類。
- ③ 日本語活性語：日本語の刺激によって活性化された漢籍語で、語源的に「和製漢語」ではない。20世紀初頭まで中国での使用例が少なかったが、中訳日本書によって頻繁に使用するようになった。
⇒「熱帯」、「細胞」、「学校」、「方案」、「改善」の類。

つまり、①の場合は日本で造語され、日本語から借用するまでは中国語にはこのような漢語の使用例がなかったと考えられるものであろう。これに対して、②、③の場合こそが近代西洋の新概念を取り入れる際、古典漢語をその意味に合わせて改造し、さらに中国語に移入した場合（金（2005）²⁾）に相当するものであり、上記の近代日本によってアレンジされ、そして中⇒日⇒中伝播ルートによって中国へも拡大し、共有された語だと考えられる。

また、本稿における調査対象の語彙が辞書リストの候補語としてすでに確定したことから、まずその結果論として、これらの語彙は「日中間近代語彙の相互影響によって一般化されたものであり、基本的には現代語として両言語の中に定着されたものである」というように認定できる。そして、本稿は上記のような異なる伝播パターンに注目し、「現代の日中両言語にも受け継がれた軍事用語の共有経緯はどうなっていたのか」という疑問から、その具体的な実態といくつかの特徴を明らかにするために、次なる各章を以て検証していこうと考えている。

4 『中日近代新詞詞源辞典』所収軍事用語から見る近代新造語の影響

(1) 漢籍出典なしの語について

前述の通り、今回の調査によって漢籍出典がなく、近代以降の造語と見られるものは63語で

2) 金（2005）では近代に改造された漢字語について、「近代に日本人が欧米の諸言語の言葉を翻訳する際、古代中国語の漢語をその意味に合わせて改造し、その改造された漢字語を中国語に移入した場合」がそれに相当したと述べている。ただし、「日本語借義語」と「日本語活性語」のような細分化した説明が見られない。

あることが判明した。これは、全体258語の中ではむしろ少数である。そして中国におけるこの種類の語の使用、普及時期はどうかとの疑問から、英華字典類の資料³⁾を参考してこれらの語を初出別で整理し、列挙すると、次の表-1の通りである。

表-1 英華字典類収録時期（初出例別）における「漢籍典なし」の語類

初出の辞書	年代	見出し語
華英字典集成 (鄭其照)	1899	回収
英華大辭典 (顏惠慶)	1908	無線、船体、船長、弾道、敵視、港湾、行進、航線、航路、航線、艦隊、艦長、軍帽、領土、砲艦、旗艦、潜航、射程、射線、憲兵、魚雷、戦線、反抗、榴弾、砲撃、砲塔、騎手、少将、勳章
徳英華文科學字典	1911	軍服
華英字典	1912	冷戦、領海
商務印書館英華新字典	1913	搭載、巡航
官話	1916	弾頭、干部、公海、航空、情報、実弾
無所見	—	触雷、番号、防弾、防空、防線、航速、航向、尖兵、艦艇、拠(據)点、軍犬、空軍、空襲、領空、前線、肉弾、戦犯、戦友、空域、空戦、掃射、着陸

表-1に示した通り、まず「前期英華字典類」⁴⁾に当たる五冊の英華字典(モリソン(馬礼遜)、ウイリアムズ(衛三畏)、メドハースト(麦都思)、ロブシャイド(羅存徳)、ドーリットル(盧公明)がそれぞれの編者に相当)から、いずれもその語例を発見することができなかつたため、近世中国における来華宣教師の翻訳造語ではないと言える。もともと、宣教師訳語の分野はほぼ自然科学の領域に集中しており、軍事分野との関わりが薄かつたと想像される。これについて、沈(2016b)からも「中国の人文科学の用語は非常に遅れていました。実学の方はいろいろありましたが、哲学を始め、人文学の言葉はほとんど皆無に近い状態」というような意見が見られる。

3) 中央研究院近代史研究所近代史數位資料庫・英華字典 (<http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php>) のデータに準ずる。(最終確認日: 2017・10・9)

4) 陳(2001)によると、十九世紀の英華字典の中、日本近代語に關係の深いものは、次の五冊である: ①モリソン(馬礼遜): A DICTIONARY OF THE CHINESE LANGUAGE PART III (1822); ②ウイリアムズ(衛三畏): An English and Chinese Vocabulary in Court Dialect (1844); ③メドハースト(麦都思): English and Chinese Dictionary (1847~1848); ④ロブシャイド(羅存徳): English and Chinese Dictionary, with Punti and Mandarin Pronunciation (1866~1869); ⑤ドーリットル(盧公明): Vocabulary and Handbook of the Chinese Language。また、意識的につかわれるため、十九世紀までのものを「英華字典」、それ以降のものを「英華辞典」と呼ぶことになった。その前者こそ筆者が呼ぶ「前期英華字典」類に相当したものである(一方、表-1に示したものが「英華辞典」にあたり、「後期英華字典」類にも言える)。

そして、日中両国軍事制度の近代化経緯から見れば理解しやすいと思われる。中国の方は1860年代の洋務運動によって、近代軍備を自前で整備しされ始め、江南製造局に代表される武器製造廠や造船廠を各地に設置した。対して、日本の方では同じ1860年代の後半、明治維新以降の富国強兵策が打ち出されたため、いち早く近代的な軍事制度が整備され、結局時期的にはやや洋務運動より遅れていたものの、近代化のスピードや効果の面では中国を越えていただろう。さらに拙稿仇（2015）にも述べたように、日本の場合、実際は明治維新以前の幕末時期から既に蘭学資料翻訳を通じて、海軍、砲術や築城といった軍事分野での専門知識（西洋兵学）を導入された。つまり、日本は中国より早い段階で西洋の軍事制度を研究、理解していたため、中国語より早い時期でその方面の訳語が創出、整備されたと言える。

前述したように、そのような西洋新概念を翻訳する際にはできるだけ「既存の漢語資源」を利用し、日本語に置き換えることが一般的であるが、上記のような一部の概念名詞は、日本にとってはまったく斬新なもの（特に兵器名や制度名がそれに相当する）であり、同じ漢字文化圏の中国にも日本にもないものである。このような場合は、古来の中国語から相当する語彙を見つけ、それを当てはめることは到底不可能であるため、幕末、明治以降の日本による造語であると思われる。

実際、表-1に示した語例のように、近代文明により創出された新概念をイメージしたもの、特に名詞の類が極めて多い。また、造語方法について、以下の数語は、名詞との関連によって発生された動詞派生語であると確信する：

触雷、搭載、防空、防弾、空襲、空戦、砲撃、巡航、掃射、着陸

たとえば、「触雷」の場合は近代兵器である「機雷」が出現し、その語の使用により派生したと見られる。「砲撃」、「掃射」の場合は、それぞれ「大砲」、「連射できる銃」の使用と普及によって、その使用法、使用動作を示す新概念であろう。

また、特に表-1の「無所見」の行にはこれら時代背景と直結し、それを強く反映した語が多く見られる。「空軍」、「領空」を例として見れば、まず飛行機の発明及び軍事領域への投入によって生まれた新概念を表す語であり、さらに上記の動詞派生現象と同類と思われる「防空」、「空襲」、「空戦」のような「空軍の運用」によってその運用法を表すための近代新語が造語された。それらの語の造語時期は飛行機のような近代兵器が活用された20世紀10年代以降であると見られ、またそのためか、表-1に示した20世紀初頭に出版されていた「後期英華字典類」からも発見することが不可能ではないかと思われる。

いずれにしても、20世紀前半では軍事科学や戦争理論などの進化があまりにも急速であった時代背景（新兵器が次々と登場）もあり、それらに合わせるために、新たな造語によって新概念の補完が行われたことも当然の結果だと考えられる。そして、同じく表-1に示した英華字典類に収録されていたのは20世紀初頭までの造語にあたり、さらにその時期の中国はちょうど日本語を大量に移入した中心期⁵⁾でもあったため、その多くはそのまま中国へも伝わり、中国語の語彙として共有された。いわゆる前節に言う「日本語借形語」のパターンにあたるだろう。

ただし、唯一例外なものと思われるのは「冷戦」の例である。『華英字典』（1912）に収録したその語に関する記述は「打冷戦 to quake with fear; to give a start」になっている、これは「寒さにぶると震えること」の意味に相当するもので、後のcoldwarの訳語ではないことは明らかである。さらに漢籍文献には見られないものの、日本語ではそのような意味用法もないため、近代中国独自の造語であろう。そして、偶然にして後の時代に生成された軍事用語である「冷戦」とは文字列が同じではあるが、その意味上の関連性がなく、本章の分類にも属さない。実際、調査によって古典漢籍に同じ文字列からなる語が見られるが、本稿の調査範囲に相当する近代軍事用語との繋がりが無い語もある程度存在したことが明らかになった。その部分について次の節で論述する。

(2) 文字列が同一ではあるが、古典漢籍語との繋がりが無い語について

前節の最後にも触れたように、文字列は同じであるものの、実際それぞれ異なる意味を表すための造語であり、互いの関連性のない語が存在している。この現象は近代新造語に見られるのみならず、古典漢籍語との間にも存在したと見られる。

本稿における調査範囲の中では、以下の数語（勿論、語義の面では在来漢語との関連性が無いと見られるため、全体的な分類としては前述の「近代以降の造語」に相当する63語に部類に入る）がそのケースに当たると判断した：

① 掩体：『水經注』に「夷皆裸身、男以竹筒掩體、女以樹葉蔽形」とある。文字通り「体を隠す」の意味を表す語として使われたが、近代日本によって造語された軍事用語（英華字典類資料から中国の翻訳例が一切発見されていないため）、またはドイツ語の Deckung、Deckungskörper、Eindeckung の訳語⁶⁾である「掩体」（射撃しやすくするとともに、敵弾から

5) 沈（2008）によれば、日本語導入期は1895～1919年のあたりであると見られる。

6) 高田善次郎・藤山治一編『独和兵語辞書』（1899）における Deckung の記述は「掩護物、蔭蔽、遮蔽、蔽障」に訳された、「掩体」としてまだ成立していないが、後の『和独兵語辞彙』（1909）は「Entai, 掩体, Deckungskörper, Eindeckung」のような記述があり、また編者の一人は同じ高田善次郎（もう一人は司馬亭太郎）であるため、当編者の考案によって Deckung（掩護物）⇒ Deckungskörper（掩体）へのように造語

射手を守るための工事などを意味する)とは別の語であると言える。

②機動：『淮南子』『説林訓』に「設鼠者機動、釣魚者泛杭」とある。「機械で動かす物事」の意味であり、その意味の相当する近代訳語としては Automaton のようなもの⁷⁾もあり、また現代中国語中にも「機動車」(日本語に言う「自動車」という派生語がよく使用されているが、軍事用語における「部隊を移動、展開させること、または機略的な運動」としての「機動」⁸⁾とは関連性がないである。

③敵意：宋代文献『建炎以來繫年要録』に「敵朝夕下陝、莫以為憂者、殆未知敵意也」とある。その下線部分の意味は「敵の意図を知らないためである」であり、現代語における「敵対しようとする心、憎む気持ち」の意味を、つまり英語の Hostility、Enmity の漢訳⁹⁾との関連性はないと言える。

④参戦：古典漢籍からは官職名(例：『宋書』[相國府置中衛將軍、驍騎將軍、左右長史、司馬從事中郎四人、主簿四人、舍人十九人、參軍二十二人、參戰十一人、掾屬三十三人])のような用例しか見られない、現代日中両言語に共通する語である「戦争、戦闘に参加する」を意味する「参戦」とは関連性がないと判断される。また英華字典類を含む中国近代訳語資料からもその近代的な用例が発見できなかった(中国における初出例は1910年以降)ため、日本によって先に造語されたもの¹⁰⁾と考えられる。

⑤兵種：この語のみまだ疑問点が残されている。なぜなら、漢籍の出典及び英華字典訳語資料からは、明代の『兵録』にある「長短兵種類甚多、而惟此一品可撃」のような微妙な例があるが、下線の部分が「長短兵、種類が甚だ多い」あるいは「長短兵種、其の類が甚だ多い」のどちらに解釈するかという問題がある。恐らく「長兵器と短兵器の種類」を意味し、現代語における「軍隊の任務による種別」とは関連性がなく、また、同じく出典例は日本の方が早い¹¹⁾ため、日本の造語であると判断される。

され、訳語の改良、継承関係があると想像される。

7) ロブシャイド『英華字典』(English and Chinese Dictionary, with Punti and Mandarin Pronunciation) (1866～1869)の記述「Automaton: 1. a machine which moves by invisible machinery 機動之器、行動被暗機所致」に準ずる。

8) 兵林館出版『兵語辞彙草案』(1888)の記述「機動 戰場ニ於テ軍隊ヲ進退スルヲ云フ」に準ずる。また、『独和兵語辞書』(1899)からは「Evolution 隊伍ノ変転、機動、Manöverieren 機動スル、Manöverkrieg 機動戦」のように、ドイツ語の訳語として対応していたことがわかる。

9) 顔惠慶『英華大辞典』(1908)の記述「Hostility: Enmity, 對敵, 敵意, 怨恨, 仇對」に準ずる。

10) 『和独兵語辞書』(1909)の記述「Sansen suru. 参戦スル, an einem Gefecht teilnehmen」に準ずる。

11) 『陸軍一年志願兵条例』「明治二二年一条」(1889)における「徴兵令第十一条に抛り一箇年間陸軍現役を志願する者は兵種及衛戍地を選び服役することを得」の記述に準ずる。また、中国の初出例としては『日本国志』(1895)「調集徴丁、區分兵種、使各従所宜」が挙げられ、日本関連情報から流入した語であることが明らかである。

それについて、日本において同じ漢語の語構成に対する認識の相違点があることを思い出せばそれほど理解し難い問題ではないと思われる。陳（2001）も和製漢語について、その多くは「語構成を細かく分析することによって、明らかに中国語において未発達な部分や漢語構造以外の部分で和製漢語が量産されていることが分かる」と指摘し、「日中間のその格差がそもそも和製漢語の造語面における最大の特徴と言えよう」というように結論付けている。つまり、たとえ文字列が偶然にして一致しているように見えても、実際日中それぞれ全く異なる発想から生み出された語である可能性がある。

上記における「機動」の語を例としてもう一回取り上げて分析してみよう。恐らく古典中国語において「機械で動かす」という動作の「道具」を言うのに対して、近代軍事用語の「機略的に運動」は動作の「方式」を言っているのであろう。またそれが「機に臨んで動かす」から「機動性のある、融通性のある」のような意味までに拡大され、後に「機動部隊」、「機動作戦」のような語が派生されたのであろう。「掩体」の場合でも、古典語が「体を隠す」というような動詞目的語構造であるのに対して、近代軍事用語の「体を隠す工事」は連体修飾構造になっているのではないかとと思われる。

以上のように、用例としては古典漢籍資料に同じ文字列で構成された語が発見できるが、それは現代語のものとは意味上の繋がりがなく、単なる同じ漢字によって組み合わせられた同形異義語であり、必ずしも古典漢籍にある語彙から継承、あるいは派生された語ではないものである、と認識しなければならないであろう。そのため、両者の意味の比較考証をしっかりと行わなければ、漢籍資料に語例があり、そのまま古典語から転用されたものと誤認する恐れがあることを言えよう。

5 『中日近代新詞詞源辞典』所収軍事用語から見る漢籍由来語の変容

(1) 訳語としての活用及び近代漢語としての転換

前章にも述べた通り、近代日本における西洋軍事用語を翻訳、吸収する際、一部の新概念を表す名詞、特に兵器名や制度名の場合は近代以降の西洋文明の発達により創造された「実際のもの」（実物）が多く、日本にとってまったく斬新なものであり、しかも日本は中国より早い段階で西洋の軍事制度と近代兵器を導入した歴史的経緯から、中国語から相当する語彙を探り、それを当てはめることも不可能であると思われるため、多くが幕末、明治以降の日本による造語だと見られる。

この現象とは相対的に、多くの戦術行動あるいはその行動状態の現象を意味する動詞、またはそれによって派生された動名詞の場合は、漢籍文献由来の語彙が多く含まれていたことが本

稿の調査によって明らかになった。その理由としては、軍事戦術およびそれに関する現象は抽象的な概念で、そのために一部は世界共通で、さらに古来の軍隊体系から受け継がれたことが多いと想像される。以上のようなことから、中国古代の兵法書や歴史書から関連語彙の発見もされやすく、その多くは近代日本語の訳語としても流用されたのである。

しかし、一つ注意すべきことは、一見動詞類に属したものの、多くは、実際名詞としても使用できるため、品詞の区別が難しい場合（中国語に言う「兼類」）がある。また、その現象は当時の日本側における翻訳作業及び訳語の整備対応の中にも見られる。

表－２ 『独和兵語辞書』（1899）の関連語彙記述から見るドイツ語訳語への対応

名詞への対応		動詞類への対応	
動員	Mobilisierung, <i>f.</i>	動員スル	Mobilisieren, <i>v.</i>
封鎖	Blockade, <i>f.</i>	封鎖スル	Blockieren, <i>v.</i>
間諜	Kundschafter, <i>m.</i> Auskundschafter, <i>m.</i>	間諜スル	Kundschaften, <i>v.</i> Auskundschaften, <i>v.</i>
	späher, <i>m.</i> Spion, <i>m.</i>		Spähen, <i>v.</i> spionieren, <i>v.</i>
侵略	Eroberung, <i>f.</i>	侵略スル	erobern, <i>v.</i>
駆逐	Vertreibung, <i>f.</i>	駆逐スル	vertreiben, <i>v.</i>
露營	Bivouak, <i>m.</i>	露營スル	bivouakieren, <i>v.</i>
防禦	Abwehr, <i>f.</i> Beschützung, <i>f.</i>	防禦スル	Abwehren, <i>v.</i> beschützen, <i>v.</i>
戦闘	Kampf, <i>m.</i> Scharmützel, <i>n.</i> Streit, <i>m.</i>	戦闘スル	Kämpfen, <i>v.</i> scharmützeln, <i>v.</i> streiten, <i>v.</i>
警戒	Sicherung, <i>f.</i>	警戒スル	sichern, <i>v.</i>

表－２は『独和兵語辞書』（1899）の訳語資料を利用し、上記の対象語彙に当たる動詞類の漢語（すべてが中国の古典漢籍文献に出典がある在来語彙）におけるドイツ語との対訳を表している。同じ漢語ではあるが、異なるドイツ語の概念へ対応させる際、表の右側のように動詞類の単語には、「+スル」といった派生辞を後接させ、一種の合成語が発生させたとも考えられ、そしてこれによって他の品詞と区別するようになった。

しかし、表左側の名詞類のドイツ語（厳格に言うとは動名詞に属し、右側の動詞とはリンクしているし、その語幹から派生され、動詞の意味を表す名詞である）では、語幹部分が共通しているため、語形だけでは、品詞の区別がつかない場合がある。もともと、日本語の動名詞を和語で表す時は、「歩く」⇒「歩き」のように連用形、つまり体言によって動詞から名詞へ転換とする。従って、上記の漢語の場合、このような形態変化がない。しかし、周知のように漢語が訳語として活用される最大の理由としては「2字3字程度の語の形に圧縮し得るかつ造語力を

持つ¹²⁾であることから、長ったらしい部分の制限と省略により、さらなる洗練な合成により二次造語（上記の例を言えば「侵略+者⇒侵略者」、「拠点+防禦⇒拠点防禦」のように）ができる。また、もともと動名詞は主語になることができるため、「防ぎ守るは大事だ」より「防禦は大事だ」のほうがより簡潔な文章を組み立てられるメリットがある。

以上のことのためか、上記における「品詞の混同」がゆるがせになり、中国語に言う「兼類」現象を普及させたではないかと思われる。また、表右側に示した動詞部分の語例はすべて前述に言う「+スル」の方式によって作られた合成語であり、そのため一見は「名詞から動詞化への転用」に相当するものと見えるが、近代漢語における「二字語化現象」（二文字漢語の大量創出と活発化¹³⁾）を考えれば、その順序は逆な部分（動詞から名詞への転換により形成された二字漢語）があると言ってもよい。

周知のように、従来の中国語の語彙は一漢字ずつそれぞれ各自の意味を持っている、いわゆる「孤立語」に属し、原則として一文字で一語が形成され、それが各造語要素として組み立てられることによって漢語が造語された。高野（2004）も「進化」（進すすみ+化かわる）と「安価」（安やすき+価あたい）二例を挙げ、「漢字をそのまま音読し語基として組み立ててゆくと漢語を造ることができる。そして、これを再び漢字に戻し、その漢字の訓をたどって理解することになる。その意味では、音訓両用の漢字が造語力に優れていることになる」と主張し、さらに「造語の視点からすれば、この経過を逆にたどることになる」と強調している。

要するに、二文字の漢語の語基は再び解析することによって、その各語基の機能した意味を辿ることができる。そこで、その理解方式に従い、上記における「兼類」に相当したと思われる語類を分析して見よう。

表-3 語基要素による意味解析

対象語	構成要素	現代語として主な意味
解放	解く+放つ	自由にすること
看守	見る+守る	刑務所などで監督、警備に従事する人
訓示	教え+示す	訓示規定、訓示項目
侵略	攻め入る+略奪する	他国の主権を侵害すること
防禦	ふせぐ+まもる	敵の攻撃などから防ぎ守ること
戦争	たたかう+あらそう	国家同士などの間の武力衝突をしている状態
警告	警める+告ぐ	事前に告げて注意を促すこと

12) 吉野（2015）序篇「蘭書の訳述」4. 漢語蘭語の造語力（p.11～p.12）より。

13) 沈（2014）二、近代訳語と語彙の二次語化（p.314）より。「日本と中国の訳語の創出においての大きな相違点は日本人は二字語を多用し、それでも意味が通じないものは四字語で表現する」とある。また、このような二字語化は訳語のより「精密さ」を追究した結果となり」と主張している。

表-3は前述における「兼類」属性に相当する語の意味を分析した結果を示している。これらの語における現代語としての意味から見れば、名詞として使用されているイメージが強いと思われるが、高野（2004）の説に従って考えれば、もともとは動詞として二語の組み合わせによって形成された複合語であると見てもよいであろう。さらに、翻訳の際、これらの語を同じ訳語として外国語の動詞概念に対応させる場合では前述のでは「+スル」の方式で活用され、これによって二文字語の動詞としても派生されたのではないかと考えられる。

また、もともと本章に取り上げた語例はすべてが中国の古典に見られる文字列であり、意味も基本古典語から継承されたものである。よって、沈（2014）で主張された「二字語化現象」および「日本語刺激語」¹⁴⁾と合わせて見れば、恐らく翻訳造語、二文字漢語の大量創出と共に、前述に言う「旧来の漢語資源」も大量に起用し、表-3に見られる旧来存在していた漢字の意味合成、アレンジによって「二文字語」に変貌し、そして一般化して、現代語的な用法に繋がれたのであろう。

さらに、本節冒頭部分にも述べた通り、近代の日本は中国より早い段階で近代化の軍事制度およびその関連用語の翻訳と整備をしていたため、後の時代（沈（2008）に言う1895～1919年頃だと考えられる）上記における訳語、新語として活用されていた古典漢籍由来の漢語も新造語と同じく中国語へ影響¹⁵⁾を与え、3章に言う「日本語活性語」現象に繋がると考えられる。

(2) 転用と派生現象から見る日中間の異同

同じく漢籍文献に出典があり、語源的に見ればある意味では共に中国語の古典漢語に由来する語類に属するものではあるが、前節に例挙げした「意味の面では基本旧来の部分を継承したもの」とは対照的に、本節に取り上げる語は近代¹⁶⁾以後、訳語、新語として活用されたため、新しい意味が生じたものである。

また、さらに現代日中両言語の中におけるこの語類の意味用法の異なる点により、本稿はさらに以下の二種類に細分して論述したい：

- ① 近代日本によって新たな意味が付与され、新語として活用された語であり、さらに現代中国語においてもその影響を受け、一部を除く、そのほかの多くの語では元の古典語の

14) 沈（2014）一、演化の道程：近代語から現代語へ（p. 305～306）より：「多くが中国の古典に見られる文字列であり、意味も古典語と歴然とした断絶が確認しにくい（中略）そのほとんどは、19世紀末から20世紀初頭にかけて急に動きを活発化させられたものである。その活発化の過程に日本語の中国訳が強い影響力を發揮した」とある。また、沈（2016）における「日本語活性語」現象もそれに相当する。

15) 紙幅の関係で、その影響を反映する具体例の論述は省略。この問題について筆者は別稿を用意して改めて述べる。

16) 中国語としては1840年以降、日本語としては幕末、明治以降という時代設定に準ずる。

用法が取って代われ、基本日本語の新義と同じ意味に使われるようになっているものである。

- ② 同じく漢籍に出典があり、語源的には中国語に由来するものがほとんどであるが、現代日本語と中国語の角度から見ると、両者がそれぞれ異なる意味に派生する現象があると見られ、いわゆる日中同形異義語に相当するものである。

①の場合、ある意味では沈(2008)で言う「既成の語形に新しい概念を結合させたにすぎない」という意味では100%日本人による新造語と言えない」に相当するものであり、また3章にも引用した「日本語借義語」のパターンに属すると見られる。しかし、本稿による抽出調査の語の範囲内には、周知の「共和」、「革命」、「自由」、「経済」のように意味の違いが歴然とした新概念を古典語に付与させ、新しい意味の語に転用させるケースに相当する語例が発見されず、これらの語(表-4)はあくまでも「古典語から新義の派生がある」ものだと判断される。

表-4 日中現代語辞書における意味の記述分類調査

	漢籍出典	漢籍出典における古来の意味	近代以降新出の意味(漢籍未見)
動員	明『明政統宗』	ある目的のために、人や物をかり出すこと	軍隊と国家が戦争のため編制と管理方法を戦時体制に切り替えること
火力	戦国『孫子』	火の力。火の強さや勢い	大砲、機関銃、小銃などの威力
兵站	明『元史』	軍が防衛や資源調達のために本拠地から離れた地点に設置された拠点	前線の作戦を支援するために、後方との中間において、軍需品などの整備補給などにあたり、また後方連絡線の確保などにあたる機関
衝撃	五代『舊唐書』	敵などに激しく突きあたってうつことまたは物体に瞬間的に、急激に加えられる力	人の心に激しい感情のたかぶりを起こさせること。激しい感動。心に受ける強い刺激
装備	明『練兵實紀』	備品・付属品などある目的に必要なものをとりつけること。また、それらがとりつけられていること	行軍・登山・旅行などで、その目的にかなった服装をしたり、必要な物品をととのえたりすること。また、そのもの。特に軍隊にいう
退役	明『度支奏議』	役職を退くこと。役をやめること	軍の将校、准士官が後備役満期になり、または、傷痕、疾病などのため軍務にたえなくなって兵役を退くこと

表-4は、この語類における『日本国語大辞典』、『広辞苑』、『デジタル大辞泉』といった現代日本語辞書及び『漢語大詞典』、『現代漢語詞典』といった現代中国語辞典が記述する意味解釈に基づき、さらにこれらの語における漢籍出典により用法も調査、整理した上、その意味を「古来」、「新出」別に振り分けて示している。

その記述から、「動員」、「衝撃」は古来の意味を保留したまま、新しい意味と合わせて併用することとなっていることが見られるが、そのほかは前述の通り、日中現代語の場合は同じく基本右側の新義部分の意味がメインとして多用され、旧来の部分の意味が退化していったと見られる。また、前述の英華字典類資料及び『申報』¹⁷⁾のような近代中国語資料を利用し、日本側の新聞資料（朝日新聞など）による新義語初出例の比較より、ほとんど日本側がより早い時期に初出例が発見されていたことから、先に新義を付与させ、転用したのが日本である可能性が高いと推測される。

さらに、分野別に見れば、「動員」、「火力」、「装備」はもともと古典語としてはいずれも軍事分野とは関係のない一般用語であるが、近代以降に軍事用語に転換されたと思われる。これに対して、「衝撃」の方は逆にもともと主に軍事分野の意味を表す語から一般用語へ意味拡大、転用された点も留意すべきで、この場合は語義本来の特質を連想してから派生したものであろう。

一方、②の場合は恐らく拙稿の仇（2016）に論述していた「教練」の語¹⁸⁾と同じく、同じ漢語に対して、その原義の特質から日中両言語における異なる連想、縮小や拡大によって新しい意味に転換されたパターンだと考えられ、次の諸語（表-5）も、その同類であると思われ、例として挙げられる。ただし、紙幅の関係により本稿は特徴的な例のみ掲げて分析する。

まず、この種類の語において、全ては上記の①部分のものと同様に、漢籍に出典がある。つまり、最初は中国から日本に伝わった語がほとんどであると考えられる。この点から見れば、当初両者の関係は密接であっただろう。しかし、異なる言語文化環境に長い間浸された結果、両者には表表面での相違が少しずつ生じたことがあると思われ、そのためか、日本語の場合、特に近代以降における翻訳造語、漢籍語を借用する際には「本義とは異なるものの、立場の置き換え、原義の特質からの連想、縮小や拡大がある。時には、それらが交じって生まれた」¹⁹⁾のような理由があると思われ、古来漢語における日本独自の意味解釈を付与させたのである。そして、後に中国語へ影響を与え、再び中国語の語彙として起用された後でも、その元来の漢語にはない新義部分の意味は現代中国語に受け入れられてない場合があり、同形異義語の発生に繋がったのであろう。

17) 近代中国において最も発行期間の長かった、そして強い影響力を持っていた新聞である。データベース化により1872~1949年に刊行されたものすべてが収録され、そしてフリーワードによる「全文検索」が可能である。

18) 「教練」という漢語は、もともと古典中国語の意味は「教えて熟練させること、軍隊を訓練すること」の意味で、明治以降の近代日本語もほぼ同じその意味で流用されていたが、その後は主に「一般国民を対象とする軍事教育」という制度名を表す語として転用されていた。一方20世紀以降の中国語では「訓練指導をする人、つまりコーチ」の意味に転換されたと見られる。

19) 木村（2013）第一章『論語』の漢語』（p28~29）より。仇（2016）もこれを引用。

表-5 元来の漢語から日中共通しない意味方向への派生した語類

漢籍出典		意味の比較			
教練	三国『心書』	共通	教えて熟練させること。または軍隊で、軍人を訓練すること	日本側	学校で教科の一つとして行なわれていた軍事的な教育と訓練。軍事訓練、学校教練
				中国側	スポーツなどの指導者、コーチ
工廠	明『國朝典彙』	共通	官営の工房、細工所	日本側	軍に直属し、兵器、弾薬などの軍需品の製造、修理を行なった工作庁
				中国側	工場、製作所
工作	南北朝『水經注』	共通	製作、作業すること	日本側	目的を達するために、計画を巡らして下準備すること（工作員など）
				中国側	仕事、職業、勤務などの意味
事変	南北朝『宋書』	共通	事態の変化、世事の変易	日本側	宣戦布告なしに行なわれる国際間の武力行為
				中国側	変乱、騒動事件、（軍事政治上の）重大な変化
検閲	南北朝『洛陽伽藍記』・崇真寺	共通	調べあらためること、検査すること	日本側	出版物や信書などの表現内容を強制的に調べること、またその制度
				中国側	軍隊を観閲する
暗号	宋『三朝北盟會編』	共通	符号で定めた合図。また、ある取り決められた方法で合図すること	日本側	暗号を使った電報、暗号電信、暗号文（中国語に言う「密碼」）
階級	漢『潜夫』	共通	地位や身分などまたはその身分、職業、財産などを同じくする者によって形成されている集団	日本側	軍人の等級、ランク（中国語に言う「軍銜」）
服役	春秋戦国『莊子』	共通	夫役につくことと兵役に服すること	日本側	刑務所で懲役の労役に従うこと
呐喊	元『戎事類占』	共通	大勢の者が一時に大声をあげて叫ぶこと	日本側	関（とき）の声をあげて激しく敵陣へ突き進むこと
爆発	明『求是堂文集』	共通	急激な化学、物理反応によって激しい勢いで破裂すること	中国側	事件や革命などが勃発する

また、表-5に示した「工廠」、「事変」、「暗号」、「階級」のように、もともと中国語としてはいずれも軍事分野とは関係が薄い一般用語と見られるが、日本によって軍事用語に転換されたという点も留意すべきだろう。一方、中国語の場合ではもともと明の時代以降、庶民層の台頭や白話文の普及によって意味に変化が生じ、古来の漢語が新たな意味に転換されたこともあ

る。その経緯があつて、現代中国語にはすでに日本によって継承された古来漢語とは共通しない語彙がすでに多数存在したと考えられる。さらに日本における「言文一致運動」と同様の事情であるとも言われる中国清末以降の「白話運動」による文章の口語化が原因だと思われる。以上のことによって語彙の面でも、新たな意味要素が生じられたと考えられる。

さらに、日本側により派生された意味部分とは逆に、こちらはももとの軍事専門用語がそれ以外の分野に意味を拡大、派生するものが見られる。「教練」、「工廠」、「工作」、「爆発」における中国語独自の用法はいずれそれに相当したのである。

以上のように、本節で例挙した語例の中には、意味や用法において部分的な差異にとどまるものもあれば、かなりの差を有するものもあることが明らかとなった。しかし、現段階では主に日中両言語における差異現象を見出して、日常的に気づいた言語現象をまとめたものにすぎない。以上に述べた各現象について、その発生原因と経緯を解明するためには、今後さらなる調査が必要であろう。

おわりに

本稿は、『中日近代新詞源辞典』に収録予定の日中同形漢語リストを調査対象として、その中の軍事分野用語として現代日中両言語に用いられたと思われる専門性の高い漢語として見られるものの数やその性質および両言語の中での位置づけなどを分析した。取り上げた語の出自やその使用状況における変遷過程を明らかにするため、以下では、要約および若干の補足、また今後の課題について述べたい。

まず、3章にも述べた通り、今回の調査対象として抽出した258語の中、漢籍にあり、中国の在来漢語から継承したと思われるものは195語である。これに対して、近代以前に出典例がなく、さらに19世紀の前期英華字典類にも収録例が発見されず、日本による新造語の可能性が高いものが63語である。よって、前者の数が圧倒的に多いと見られ、全体の大きな割合を占めている。

その中には特に軍事戦術、動作など抽象的な事象を表す語が集中している。そのほかにも、一見西洋の新概念が反映され、近代以降の新造語のイメージが強い語も存在したが、実際漢籍資料に存在し、いずれも翻訳の際に起用、再生されたものである。また、現代中国語における上記の語類の位置付けについては、同じく3章で述べた通り旧来の意味用法を継承し、使用上にも変化なく現代語に至るではなく、多くの語は近代日本語の訳語、新語として活用した後に再び中国語へ影響を与え、それによって中国語の現代語として確立された（本稿冒頭に言う漢語の中⇒日⇒中伝播ルートおよび沈（2016）に言う「日本語活性語」現象に当たる）というよ

うな経緯があったのである。さらに、その過程の中には、4章に言う使用上の品詞用法の変化や5章に言う日中同形異義語が発生したことも見られるであろう。

一方、後者である「近代以降の新造語」と見られるものが全体的には少数に見られるものの、前述の前期英華字典類にはいずれも用例がなく、中国語としての使用と普及は19世紀末から20世紀以降の時代から始まった可能性が高いと見られ、よってその多くは明治以降の日本による造語で、日清戦争以降に中国に流入、借用されたことが想像される。

また、この種類の語は近代以降の西洋文明の発達により創造された文物、つまり「新概念」、特に兵器、装備などのような「実物」を意味するものが多いと見られる。前述の「漢籍に由来する在来漢語」では抽象的な戦術、現象などの概念を表すものが多いという点から見ると、むしろ対照的だと思われる。以上のことから、これらの語の成立には、それぞれの時代背景が関わっていたと見られ、ある意味では明治以降の近代という特別な時代が投影されているとみることができるだろう。

そのほか、4.2章に言う文字列上には漢籍語と同形ではあるものの、翻訳の時偶然にして同じ漢字の組み合わせを取っていた、意味上は必ずしも在来漢語から転用したのではないと見られる語もある。ただ、これはあくまで筆者による判断であり、それを確実に証明するには今後更なる語誌調査が必要だと考えられる。

以上のようなことがあったため、今後は、各々の対象語について、引き続き英華辞典資料、さらには、日本明治初期の訳語辞典や新聞雑誌を利用して、その詳細な語誌調査を進めたいと思っている。それによって、これらの語における訳語として創出された新漢語の成立及びその伝播の経緯、また現代の日本語、中国語の中での位置付けが明らかになっていくと考えている。

参考文献(年代順)

- 飛田良文 (1966) 「明治以後の語彙の変遷」『言語生活』182
- 陳 力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』 汲古書院
- 信岡資生 (2003～2008) 「明治期の兵語辞書について — ドイツ語を中心にして」(一)～(五) 成城大學 経済研究 (162)、(163)、(165)、(169)、(181)
- 高野繁男 (2004) 『近代漢語の研究 — 日本語の造語法・訳語法 —』 明治書院
- 金 光林 (2005) 「近現代の中国語、韓国・朝鮮語における日本語の影響 — 日本の漢字語」の移入を中心に —」『新潟産業大学人文学部紀要』17 (http://www.jfe-21st-cf.or.jp/jpn/hokoku_pdf_2008/asia05.pdf)
- 沈 国威 (2008) 「漢字文化圏における近代西洋新概念の受容・交流・共有異化に関する研究」JFE21世紀財団 Homepage
- 田中牧郎 (2013) 『近代書き言葉はこうしてできた』 岩波書店
- 木村秀次 (2013) 『近代文明と漢語』 おうふう

- 沈 国威 (2014) 「近代新語訳語と中国語の二字語化」『環流する東アジアの近代新語訳語』ユニウス
- 胡 琪 (2014) 「『五国対照兵語字彙』の研究」北海道大学文学研究科博士後期課程学位論文
- 吉野政治 (2015) 『蘭書訳述語攷叢』和泉書院
- 沈 国威 (2015) 「『中日近代新詞源辞典』の編纂について」『或問』28
- 仇 子揚 (2015) 「日本近代軍事用語の成立に資する漢籍とその語彙」『或問』28
- 沈 国威 (2016a) 「日本語がどのように中国語に影響を与えたのか」『東西学術研究所2016年度言語接触研究班例会予稿集』
- 沈 国威 (2016b) 「漢字文化圏における近代語彙の形成と交流」『高知大学留学生教育』10
- 仇 子揚 (2016) 「『教練』の語誌的研究——日中比較の視点から見る語義の変遷と転換」『或問』29
- 仇 子揚 (2017) 「漢籍語「爆撃」の語誌変遷について——「爆発」、「炸裂」から「爆弾攻撃」への転用経緯」『東アジア文化交渉研究』第10号

